

ガンゲーシャの主題性定義について

山 本 和 彦

I 問題の所在 ガンゲーシャ (Gaṅgeśa, ca. AD 1325) 以前の主題 (pakṣa) は、疑惑 (saṃśaya, sandeha or sandigdha) を持つという主題の疑惑 (saṃśaya-pakṣa) 理論¹⁾と、意欲 (icchā or siṣādhayaṣā) を持つという主題の意欲 (icchā-pakṣa) 理論²⁾とのふたつに大別される。ガンゲーシャの主題性 (pakṣatā) 定義の意義は三点ある。第一は、古典論理学では主題が定義されていたのに対して、新論理学では主題性が定義されるようになった点である。主題性は非存在 (abhāva) であり、主題の決定要因と考えられるようになる。第二は、立証意欲 (siṣādhayaṣā) があれば「すでに成立しているものをさらに成立させること」(siddhasādhana)³⁾は過失ではないという点である。第三は、定義中に用いられる非存在の論理学的な用法である。それらは、限定的非存在 (viśiṣṭābhāva)、両立の非存在 (ubhayābhāva)、選言の非存在 (anyatarābhāva) と呼ばれる。これらの考えは、ガンゲーシャ以前にその萌芽があり、彼によって明確な定義が与えられ明言された点に意義がある。本稿ではガンゲーシャ著『タットヴァ・チンターマニ』(Tattvacintāmaṇi), 「主題性章」に見られる先行定義と彼自身の定義とを比較検討する。

II 主題性暫定的定義 『タットヴァ・チンターマニ』, 「主題性章」, 「暫定的定義」では以下(1)～(3)の3つの定義がガンゲーシャによって考察される。

(1)ここ(主題の定義)では、まず疑惑のある証明されるべき属性を持つ者が主題であるということはない。実に疑惑は「主題の」限定者ではないのである。なぜなら確認知以前に、証因の知覚や遍充関係の想起など「が存在すること」によって、それ(疑惑)は「すでに」消滅しているからである。「また疑惑は主題の」表示者でもない。なぜなら、「疑惑には」区別者性がないという過失があるからである⁴⁾。

これは、ケーシャヴァの定義⁵⁾であり、ガンゲーシャは「主題の疑惑理論」に基づくこの定義を批判する。「山に火がある。煙のゆえに」という例で示せば、第一刹那に「あの山に火があるのかどうか」という疑惑 (sandeha) が起こる。第二刹那に「煙を見る」という証因の知覚 (lingadarśana) が起こる。第三刹那に「煙のあるところには必ず火がある」という遍充関係の想起 (vyāptismaraṇa) が起こ

る。第四利那に「あの山に煙と火との遍充関係がある」という主題の属性であること (pakṣadharmatā) と遍充関係の想起とが結合した知識である確認知 (parāmarśa) が起こる。第五利那に推理知 (anumiti) が生じる。しかし、確認知が起こる第四利那には疑惑はすでに消滅してしまっているので、疑惑は主題性の限定者 (viśeṣaṇa) にはならない。さらに、疑惑は表示者 (upalakṣaṇa) にもならない。限定者にならないのと同じ理由で、区別者 (vyāvarttika)⁶⁾ にならないからである。したがって、疑惑は主題の成立には関与せず、この定義は不適当である。

(2) また「主題性とは」所証があるという認識と、所証がないという認識との非存在ではない⁷⁾。なぜなら両立の非存在はひとつずつ存在する場合でも、存在するからである。また両方の非存在がそのようなもの(主題性)なのでもない。所証がないという認識の非存在は必要ないからである。湖などが主題である場合でも「主題性は生じるが」、所証がないという認識や因が成立しないことなどが認められることにより推理知は生じないからである。また、「主題性は」所証があるという認識の非存在でもない。「[アートマン]は聞かれるべきであり、考えられるべきである」という天啓聖典「が根拠になること」により、同じ対象を持つものを聞いた直後に、推理 (manana) による理解があるからである。知覚が経験されていても、推理は経験されるからである。また、ある証因によって「推理が」経験されている場合でも、別の証因によってそれ「と同じ所証」が推理されるからである。なぜなら「[アートマンは] 多くの根拠によって考えられるべきである」という伝承聖典「の言及」があるからである⁸⁾

これはマニカンタの定義である⁹⁾。ガンゲーシャはこの定義を(a)~(c)の三通りに解釈し、批判する。「所証があるという認識」(sādhakapramāṇa=p) とは、主題(山)に所証(火)があることが決定している認識のことであり、「所証がないという認識」(bādhakapramāṇa=q) とは、主題(山)に所証(火)がないことが決定している認識のことである¹⁰⁾。「p と q との非存在」= $\sim(p \cdot q)$ には、① ($\sim p \cdot q$)、② ($p \cdot \sim q$)、③ ($\sim p \cdot \sim q$) の三通りある。

(a) 「非存在」(abhāva) が「両立の非存在」(ubhayābhāva) である場合。ガンゲーシャが述べる両立の非存在の定義は「両立の非存在は、ひとつずつ存在するところに、存在する」であり「ひとつずつ存在するところ」(pratyekasattve) は、① ($\sim p \cdot q$) と ② ($p \cdot \sim q$) である。この場合に「両立の非存在が存在するから」(ubhayābhāvasya sattvāt) と言われる。①主題に所証があるという認識がなく、所証がないという認識がある場合。山に火があるという認識がなければ主題は成立するが、山に火がないという認識があれば主題性は成立しない。②主題に所証

があるという認識があり、所証がないという認識がない場合。山に火があるという認識があれば、山に火がないという認識がなくても主題性は成立しない。したがって、この定義は不適當である。

(b)「両方の非存在」(abhāvadavya)。(a)の定義の非存在を「両方の非存在」と考えた場合。「所証があるという認識」と「所証がないという認識」との両方がない③(～p・～q) 場合、山に火があるという認識がなく山に火がないという認識もなければ、主題性は成立する。しかし「所証があるという認識の非存在」(～p)だけでも主題性は成立するので、「所証がないという認識の非存在」(～q)は論理的簡潔性(lāghava)という観点から不必要であり、この定義は不適當である。さらに「主題」を「湖」と考えた場合、「湖に火があるという認識」がなくて(～p)、「湖に火はないという認識」がなければ(～q)、主題性が成立してしまう。主題性が成立しても、湖に煙は存在しない(bādha)ので、煙は因として成立せず(hetvasiddhi)、推理知は生じない。したがって、この定義は不適當である。

(c)「所証があるという認識の非存在」。(b)の定義から「所証がないという認識の非存在」を削除したものである。山に火があるという認識の非存在があれば、主題性は成立する。しかし、山に火があるという認識があっても、同じ対象を別の証因で推理することは可能であるから、主題性は成立する。したがって、この定義は不適當である。

(3)主題とは、立証意欲のある証明されるべき属性の基本である。それゆえ、解脱を求める人の言葉から、アートマンが理解された後でも、推理(manana)は解脱の手段であるからすでに認識されている対象を推理しようという意欲によってアートマンは推理されるのである¹¹⁾。

これは、ジャンタの定義である¹²⁾。言語知によって、アートマンの存在が認識された後でも、意欲を伴う推理によって推理知が成立する。この定義は、主題性の意欲理論であり、ガンゲーシャは暫定的定義としてこの定義を認めている。

Ⅲ 主題性究極的定義 ガンゲーシャは主題性を次のように定義する。

[ガンゲーシャによって究極的定義が] 言われる。立証意欲の非存在と共に働く所証の認識の非存在のあるところが、主題である。それゆえ、立証意欲の非存在と共に働く所証の認識のあるところは、主題ではない。所証の認識があってもなくても、立証意欲があるところは、もしくは立証意欲と所証の認識との両方の非存在があるところは限定的非存在であるから主題性がある¹³⁾。

ガンゲーシャは、主題性を「立証意欲の非存在」(siṣādhayaṣāviraha=x)と「所証の認識」(sādhakapramāṇa=y)との非存在だと言う。「x と y との非存在」=～

($x \cdot y$) は、① ($\sim x \cdot y$)、② ($x \cdot \sim y$)、③ ($\sim x \cdot \sim y$) の通りあり、彼はこれを限定的非存在 (viśiṣṭābhāva)¹⁴⁾ と呼ぶ。「立証意欲の非存在」があり (x)、「所証の認識」もある (y) 場合、主題性は生じない。①「立証意欲の非存在」がなく ($\sim x$)、「所証の認識」がある (y) 場合、主題性は生じる。②「立証意欲の非存在」があり (x)、「所証の認識」がない ($\sim y$) 場合、主題性は生じる。③「立証意欲の非存在」がなく ($\sim x$)、「所証の認識」もない ($\sim y$) 場合、主題性は生じる。

Ⅳ まとめ 以上の考察によって明らかになったことは、「問題の所在」で述べた三点と『タットヴァ・チンターマニ』、「主題性章」の構成である。「暫定的定義」においてガンゲーシャは主題性の疑惑理論を否定し意欲理論を支持しており、「暫定的定義」としてジャンタの意欲理論に基づく定義を認めている。すなわち、彼は暫定的立場と究極的立場とを明確に区別していたのである。これは彼の著作スタイルとして「主題性章」以外の章でも考慮すべき点であろう。

- 1) Varadarāja (ca. AD 1100-1150), Śivāditya Miśra (ca. AD 1100-1150), Keśava Miśra (ca. AD 1225-1275), Maṇikaṇṭha Miśra (ca. AD 1300), Jivanātha Miśra (ca. AD 1400) などがこの考えを支持している。
- 2) Śaṅkara Svāmī (ca. AD 550), Jayanta Bhaṭṭa (ca. AD 840-900), Vyomaśiva (AD 950), Vācaspati Miśra I (AD 976), Śrīdhara (AD 991), Udayana (ca. AD 1025-1100), ガンゲーシャなどが支持しており、ガンゲーシャ以降の大部分の新論理学者はこの考えを支持するようになる。
- 3) Cf. *Dharmottarapradīpa* (Patna, 1955), p. 19.
- 4) tatra na tāvat sandigdhasādhya dharmavattvaṃ* pakṣatvam. sandeho hi na viśeṣaṇam, parāmarsāpūrvam liṅgadarśanavyāptismaraṇādīnā tasya nāśāt. nopalakṣaṇam, avyāvarttakatāpatteḥ. *Gādādhari* (ChSS 42, Benares, 1913-27), p. 1079. (* Cf. *Tattvacintāmaṇidīdhitiprakāśa*, Calcutta, 1963, p. 875)
- 5) sandigdhasādhya dharmā dharmī pakṣaḥ. *Tarkabhāṣā* (Poona, 1979), p. 44. 「主題とは、疑惑のある証明されるべき属性の基体である。」この定義は、Advaita-Vedānta 学派の Śrīharṣa (ca. AD 1125-50) によってすでに述べられている。sandigdhasādhya dharmaviśiṣṭo dharmī pakṣaḥ. *Khaṇḍanakhaṇḍakhāḍya* (KSS 197, Varanasi, 1970), p. 381. 「主題とは、疑惑のある証明されるべき属性に限定された基体である。」
- 6) 区別者 (vyāvarttika) は限定者 (viśeṣaṇa) と表示者 (upalakṣaṇa) の2種類ある。限定者は直接的な区別者であり、表示者は間接的な区別者である。See *Tattvacintāmaṇi*, *Pratyakṣakhaṇḍa*, (Tirupati, 1973), pp. 863ff.
- 7) 先駆的には、ヴァーチャスパティ (*Nyāyavārttikatātparyāṭikā*, CSS 18 & 29, Calcutta, 1936-44, p. 136) とウダヤナ (*Nyāyavārttikatātparyāpariśuddhi*, Calcutta, 1911-24, p. 510) が既にこの “sādhakabādhakapramāṇābhāva” という表現を用

いている。

- 8) nāpi sādhakabādhakapramāṇābhāvaḥ, ubhayābhāvasya pratyekasattve 'pi sa-ttvāt. nāpy abhāvadvayaṃ tathā, bādhakapramāṇābhāvasya vyarthatvāt, hṛd-ādeḥ pakṣatve 'pi bādhahetvasiddhyāder āvaśyakatvenānumityanutpādāt. nāpi sādhakapramāṇābhāvaḥ, śrotavyo mantavya iti śrutyā samānaviśayakaśravaṇ-ānantaraṃ mananabodhanāt. pratyakṣadrṣṭe 'py anumānadarśanād. ekaliṅgāva-gate 'pi liṅgāntareṇa tadanumānāc ca mantavyaś copapattibhir iti smaraṇāt. *Gādādhari*, p. 1088.
- 9) yatra hi saṃśayavirodhisādhakabādhakapramāṇābhāvas tatranumityutpattiḥ. *Nyāyaratna* (Madras, 1953), p. 115. 「実に疑惑を阻害する所証の認識と所証がないという認識との非存在があるところに推理知が生じる。」
- 10) sādhakabādhaketi sādhakapramāṇaṃ pakṣe sādhyaniścayaḥ bādhakapramāṇaṃ pakṣe sādhyābhāvaniścayaḥ tadabhāva ity arthaḥ. *Tattvacintāmaṇirahasya* (= *Anumānacintāmaṇi*, Calcutta, 1884-1901), pp. 420f.
- 11) atha siśādhayiṣitasādhya dharmā dharmī pakṣaḥ. tathā hi mumukṣoḥ śabdād ātmāvagame 'pi mananasya mokṣopāyatvena siddhiviśayānumiticchayātmānum-ānam*. *Gādādhari*, p. 1089. (*See *Pakṣatā*, Tirupati, 1988, p. 63)
- 12) siśādhayiṣitadharma viśiṣṭo dharmī pakṣaḥ. *Nyāyamañjarī* (Vol. 1, Mysore, 1969), p. 283. 「主題とは、立証意欲のある属性に限定された基体である。」ヴァーチャスパティも同様に言う。siśādhayiṣitadharma viśiṣṭo dharmī. *Nyāyavārttikatātpa-ryaṭīkā*, p. 277. 一方、シュリーハルシャはこの定義を批判する。kaś cāyaṃ pakṣo nāma yad dharmatvaṃ pakṣadharma tvaṃ. siśādhayiṣitasādhya dharmā dharmī iti cen na. *Khaṇḍanakhaṇḍakhāḍya*, p. 380.
- 13) ucyate, siśādhayiṣāvira hasa hakṛtasādhakapramāṇābhāvo yatrāsti sa pakṣaḥ. tena siśādhayiṣāvira hasa hakṛtaṃ sādhakapramāṇaṃ yatrāsti sa na pakṣaḥ. yatra sādhakapramāṇe saty asati vā siśādhayiṣā, yatra vobhayābhāvas tatra viśiṣṭābhāvāt pakṣatvaṃ. *Gādādhari*, p. 1092.
- 14) tatreti, prathame kevalaviśeṣaṇābhāvavakṛto dvitiye viśeṣaṇaviśeṣyobhayābhā-vakṛtas tṛtiye ca kevalaviśeṣyābhāvavakṛto viśiṣṭābhāva iti bhāvaḥ. *Tattvacintāmaṇirahasya*, p. 435. 「『そこにおいて』とは、第一に限定者だけの非存在によって作られたものであり、第二に限定者と被限定者との両方の非存在によって作られたものであり、第三に被限定者だけの非存在によって作られたものである限定的非存在という意味である。」

付記：本発表（於、花園大学、平成7年6月11日）において、東京大学文学部助教授丸井浩先生ならびに名古屋大学文学部助教授和田壽弘先生より有益なご助言を戴きましたことに感謝いたします。

〈キーワード〉 Gaṅgeśa, *Tattvacintāmaṇi*, pakṣatā

(大谷大学真宗総合研究所研究補助員, Ph. D.)